



全道展の志向するもの

原 義 行

全道展がその創立の当初「北海道の美術文化の水準を高め、美術の普及に貢献する、より純粹な公募展を作ろう」と新しい意欲を燃やしてたちあがってから早くも十七年。その間、会には多少の変化もあり、幾人かの先輩作家を失って、年輪の厚さを感じたが、終始純粹にその信念を保ち、歩み続けてこられたということは、世論の支持もさることながら、会を構成する会員のゆるぎない信念のたまものであった。

「全道展は全道的なひろがりを持つとともに、東京との通風口を数多く持つことによって、単なるブロック展にとどまらぬスケールを身につけ、それを展覧会の性格にしようとした」（小史、全道展十五年、竹岡和田男）ことは特殊な環境にあるこの北海道に於ては誠に欠くべからざる要素であり、切実な願いであったが、十七年の年輪の中でそれは着々と実現されていった。

全道展が中央に直結する展覧会として多くの有望な新人作家を輩出し、それら新人群は中央に於てめざましい活躍を続けているということは、実に一地方の公募展を超えるスケールを身につけてきたことの証左であり、本展が誇っている一部面である。

しかし、全道展が創立の当初志向したものは、決してそれだけではなく、北海道の文化向上とその普及に貢献することであったので、そうした有力作家を育て得たということはむしろ副産物であったといい得よう。

全道展が本道に於て最も尖鋭な公募展であることは、今さらいうまでもないが、その懐疑的、実験的態度は今日まで新鮮な時代感覚と共に、刻々に流れ動く美の源流をくみとり、多くの問題を提示して、観る者に多くの感動と抵抗を与え、純粹に美術の在り方を示してきた。「本道に作家の質だけがすべてである展覧会」として、一貫して続けられてきたことが前記のような結果をもたらしたと言い得る。このように純粹なもの、新鮮なものを失うことなく続けられたということは、本展が極力精銳主義を標榜し、厳選を堅持してきたからに外ならない。作品を前にして、とかく介在し易い人間の感情やつながり、そうしたものから生まれるマンネリズムはお互に峻厳に拒否してきた。そうして真に個性の豊かな光ったもの、新鮮な感動とヴァイタリテイの溢れたものだけに眼を輝やかし、純粹に作品だけを見つめてきた。

こうした会の態度は、あるいは出品者の減少を招くかも知れないことを考えぬわけではなかったが、出品する作家の作家精神は、そうしたひよわな杞憂を杞憂に終らせ、年ごとにレベルは向上し出品数も増加していることは今の態度が多くの支持を得ていることの明瞭な裏書である。従って本展に出品する者ではんの慰みに描いている安易な態度のものは全くない、たまたま手なぐきみに描いたものが入選することがあっても、作家精神を持ち得ないものはこの会では生存でき難いのである。他に職業を持つ持たぬにかかわらず、全精神を傾倒して制作に苦闘する人達だけが生きていける場なのである。

しかし本展の「作品の内容はほとんど抽象に傾いていた。これは全国的な傾向であったが、全道展の若い出品者たちは、自由に自己のやりたいことを伸ばす会の空気の中で、敏感に現代を身に感じ、それを多く抽象という形態の中で表現して」(小史、全道展十五年、竹岡和田男)いる現在、抽象の作品が多く搬入されるのは当然であるが、具象といい非具象といい、われわれは表現の様式にはいささかもこだわらない、要は、如何に自己を解放し、如何に「自己を主張」したか? にきびしい眼を注いできたのであって、こうした態度こそ会を愛し育てる正しい姿勢であると確信しているのである。

全道展はあくまでも日本の美術に貢献する場であり、互に自己の価値を問う実施の場であると共に「社会と密着した」文化団体としての自覚と行動にたち、(中略)美術館建設運動にも、生活改善運動にも、あるいは政治運動にも、全道展は一つの指導的存在として、雄々しく先頭に立たなければならぬ」(同上、竹岡和田男)ことを一層強く自覚し、今や半世紀を迎えようとして種々な問題の山積する本道美術界に果敢に幅広い前進を誓わなければならない。